

	[1]
氏 名	池 村 彰 子 <small>いけ むら あき こ</small>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学 位 記 番 号	文博第 224 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 27 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	One Night Journey to Conversion -A Comparative Study of A Christmas Carol and The Chimes-
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 ジェイムズ・カーワン 副 査 教 授 干 井 洋 一 副 査 教 授 高 橋 美 帆

論 文 内 容 の 要 旨

池村彰子氏が提出した論文は英語で書かれ、序論、3つの章からなる本論、結論、注、参考文献から構成されている。各章の内容は以下のとおりである。

第 1 章 …… Charles Dickens の経歴

- 1.1 幼少時代
 - 1.1.1 ウォレン靴墨工場
 - 1.1.2 マーシャルシー債務者監獄
- 1.2 ジャーナリストとしての経歴
- 1.3 作家としての成功
- 1.4 読者との関わり

第 2 章 …… ヴィクトリア時代の社会

- 2.1 子どもの教育
- 2.2 人口
- 2.3 新救貧法
- 2.4 チャーチスト運動

第 3 章 …… プロットの構成と語りの技法

- 3.1 プロットの概要
 - 3.1.1 *A Christmas Carol*
 - 3.1.2 *The Chimes*
- 3.2 主人公
 - 3.2.1 Scrooge
 - 3.2.2 Toby
- 3.3 超自然現象

3.3.1 三人の幽霊と Scrooge の旅

3.3.2 鐘の精と Toby の旅

3.4 クライマックス

3.4.1 *A Christmas Carol*

3.4.2 *The Chimes*

序論では、本研究における背景と目的の概説を行い、主要な先行研究を提示した後、本論文の展開を述べている。第 1 章では、Dickens の経歴を 4 つの視座から考察している。まず、「幼少時代」では、読書が大好きで想像力豊かであった少年 Dickens が体験した、二つの大きな出来事を取り上げた。それは、「ウォレン靴墨工場」における児童労働、借金を抱えた父親が入ることになった「マーシャルシー債務者監獄」についてである。この出来事によって Dickens が受けた精神的苦痛がどれ程大きいものであったかを明らかにしている。次に、「ジャーナリストとしての経歴」の中では、議会記者として速記術を駆使していた過去、演劇批評やロンドンの日常を記事にする新聞記者としての経験が、Dickens の「作家としての成功」に繋がったことが指摘されている。作家として有名になった後も Dickens は積極的に慈善活動に関わっており、視察した貧民学校の酷い実態を目の当たりにしたことが *A Christmas Carol* を書くきっかけとなった。また、*The Chimes* にもそのテーマは受け継がれているのである。これらの事実を明らかにしたことは、両作品のより深い理解に貢献すると考えられよう。この章の最後では、Dickens と「読者との関わり」について、Dickens が行った初めての公開朗読が *A Christmas Carol* であることに着眼し、その活動を中心に考察を進めている。死の直前まで公開朗読を続けた結果、*A Christmas Carol* を 127 回も朗読していたという事実は、この作品に対する Dickens の思い入れの強さを明らかにしている。また、彼の公開朗読におけるパフォーマンスは現代にも通じるほどエンターテインメント性が高いものであり、池村氏はそれが今の人気にも繋がっているのだと分析している。このことは、常に読者との関係を重んじ、読者を楽しませるためには努力を怠らなかった Dickens だからこそ成し得えた功績なのである。以上のように、この章では Dickens の多様な経歴の中から、*A Christmas Carol* と *The Chimes* に関わりが深い部分を的確に解き明かしている。

第 2 章では Dickens が強い関心を寄せていたヴィクトリア時代の社会問題の中から「子どもへの教育」、「人口」、「新救貧法」、「チャーチスト運動」の 4 つに焦点を絞り、Dickens がどのようにこれらのテーマを作中で融合させ、描いているかを提示している。彼が貧民学校を視察した際に見た子どものイメージは、*A Christmas Carol* の中で Ignorance と Want という名で登場しているが、このシーンは Scrooge が見た夢の世界における一部分として描かれているにすぎない。一方、Toby の夢の世界では、入水自殺を図る娘の Meg、Fallen Woman にまで墮落した Lilian、放火に手を染める Will Fern など、過酷なシーンが繰り広げられる。歴史的背景を踏まえた上でこれらの描写を考察すると、*The Chimes* はジャーナリスティックな観点においては高く評価されるべき作品だと位置付けることができる。

第 3 章では、両作品を「プロットの構成」と「語りの技法」を基盤として考察し、特に「主人公」、「超自然現象」、「クライマックス」に重点を置きながら比較分析を行った。その結果、全ての点において *A Christmas Carol* では Dickens の語りの技法が十分に発揮され

ており、特に主人公である Scrooge と、彼を回心へと導く幽霊たちの描写が優れていることが明らかになった。作品の冒頭部分では嫌われ者として描かれている Scrooge であるが、人間心理の表と裏をうまく体現するキャラクターとして存在しており、我々は無意識に彼に共感することになる。また、個性的な幽霊の描写や、Dickens が細部まで指示を出した挿絵などが超自然現象の恐ろしさを効果的に表現しており、それは未来の世界においてクリスマスの幽霊が Scrooge の死を示唆するクライマックスシーンで最高潮に達する。更に、Scrooge の変化が明確に描かれていることも重要な点だと氏は指摘している。作品の最後で、回心後の Scrooge は心からクリスマスを楽しみ、Bob の家族にターキーを送り、貧しい者たちへ寄付をし、ついに Bob の給料を上げることを決意する。これらの描写を検討した結果、*A Christmas Carol* は「Scrooge の回心への一夜の旅」という首尾一貫したプロット構成によって成り立っており、その中で Dickens の巧みな語りの技法が最大限に発揮されていることが、この作品の人気を支える大きな要因であると結論付けた。一方、*The Chimes* の主人公 Toby は心の優しい真面目な老人であり、Scrooge とは対照的な人物である。読者は Toby が回心することに必要性を見出せないまま、この作品を読み進めることになる。それに加え、夢の世界において Toby が自ら行動を起こすことは少なく、次々と描かれる社会問題を観察するだけの存在にとどまっているため、読者は Toby に共感できないのである。また、彼に警告を与える鐘の精にも個性はなく、その挿絵からも恐ろしさは伝わってこない。作品の最後において、どのような変化が Toby の回心後に起きたのかが描かれていないことも大きな問題である。このように *A Christmas Carol* では顕著に表れていた Dickens の語りの技法が *The Chimes* の中では発揮されておらず、数々の点において説得力が欠けているため、*The Chimes* の人気が衰えていったのではないかという結論に達した。以上のように、本論文は両作品を様々な角度から比較分析することによって、これまで研究が浅かった部分について新たな研究成果を提供しており、今後の Dickens 研究をさらに深化させていく論文となっている。

論文審査結果の要旨

以下一部を英語表記とする。

Ikemura Akiko's thesis is a comparative study of Charles Dickens' *A Christmas Carol in Prose* (1843) and *The Chimes* (1844). It particularly focuses on *The Chimes*, which has received comparatively little critical attention. Her main aim in the thesis is to account for this lack of critical attention and for the relative unpopularity of *The Chimes* when compared to the enduring popularity of *A Christmas Carol*.

She begins with a brief biography of Dickens, highlighting particularly those early experiences that are reflected in the two works. She then looks at social conditions in Victorian Britain, again concentrating particularly on those aspects of these conditions - education, the question of population, the New Poor Law, and the Chartist movement - that are reflected in *A Christmas Carol* and explicitly dealt with in *The Chimes*. Ikemura-san then examines compares the two works in terms of plot structure and narrative technique. While noting that the plots are in many ways similar,

she points out, through a detailed analysis, the ways in which the narrative structure and the character of the respective protagonists - Scrooge and Toby - are very different. She also compares those elements that are similar in the stories - the use of supernatural phenomena and the protagonist's "conversion" - in order to highlight the ways in which *The Chimes* fails to engage the readers interest or sympathy in the way that *A Christmas Carol* does.

Ikemura-san has done an excellent job of analyzing those properties of *The Chimes* that account for its relative lack of popularity. She has also shown how these properties arise from Dickens' particular intentions in writing *The Chimes*: to directly address topical social concerns of the time in which it was written. Although little critical attention has been given to the work, she has read widely in the secondary literature and used her reading judiciously in order to illustrate and expand her argument.

Ikemura-san's work is soundly argued and well-informed, and shows a high degree of sensitivity to the narrative elements that contribute to the final effects of the works she discusses. I feel that her study is a useful contribution to the critical discussion of Dickens' work and I would recommend it be awarded the degree of PhD.

以上のように、本論文は博士論文として価値あるものと認める。